

教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会

発行者 柿 沼 隆 久

編集 広 報 部

— も く じ —

◎巻頭言	1	◎関ブロ群馬大会報告	4・5
◎県教頭会結成50周年記念事業		◎特色ある学校	6
・記念式典・研究大会	2	◎地区だより	7
（基調講演・シンポジウム）		◎ひろば・編集後記	8
・研究大会（係・運営委員・会員から）	3		

東日本大震災の復興支援

巻 頭 言

青源味噌株式会社 代表取締役会長 青 木 直 樹



私は、本年6月まで宇都宮ロータリークラブの会長を務めておりました。ロータリークラブとは、現在、200以上の国と地域に120万人以上の会員を有する世界最大の奉仕団体であります。ロータリークラブは、様々な事業を持ち奉仕活動を展開していますが宇都宮ロータリークラブは、本年1月がちょうど60周年記念の年に当たりました。節目の時には、記念事業としてより大きな活動を行います。昨年7月に会長に就任してから今回の記念事業は、東日本大震災の復興支援に絞込み、ただお金や物を寄付したりするのではなく、本当に必要としている被災者の皆様に本当に必要な物を届けたいと、プロジェクトチームを結成して情報を収集し何度も打合せを重ねました。たまたまメンバーの知人に大きな被害のあった気仙沼商工会議所の副会頭の方がいらして、その方に私どもの例会で卓話をしていただきました。被災地の凄まじい生の声を

お聞きして、早速プロジェクトのメンバーが現地に飛び話を聞くと、気仙沼は住民の70%以上の方々が漁業と何らかの係わりが有り、生活をするには、まずその要である漁協の復興が第一との事でした。「海と生きる気仙沼」には、今何が一番必要なのかを漁協の方々と何回も話し合いを持ちました。フォークリフトも魚を入れる水槽も漁をする網も、何もかも津波に飲み込まれて必要な物だらけでしたが、その中から最終的にトラックが良いとの結論にいたりしました。2台のトラックを贈呈する事になったのですが、ぜひ宇都宮の子どもたちの復興を願うメッセージも一緒に送りたいということで、宇都宮市立西小学校の皆さんにお願いをしてトラックのボディーに、1年生から6年生までの全児童一人一人が手形を押し、その手形を鱗に見立てたカラフルお魚をペイントしてもらいました。2月にトラックに桜の苗木を積み込み気仙沼漁協にお届けしたのですが、組合長さんを始めとしてスタッフの方々が口を揃えて、「トラックもありがたいが何よりも子どもたちの気持ちうれしい。」と大感激していただきました。その後、5月に気仙沼を訪れましたが、トラックのボディーで元気に魚たちが泳ぎ回り大活躍をしていました。11月には、トラックのお礼にという事で気仙沼から6千匹の秋刀魚が届きました。その新鮮な秋刀魚を宇都宮市民の皆さんに焼いて無償で食べていただき、傍らに義援金箱を置かせてもらいましたが、市民の方々や観光客の人達からも沢山のご寄付をいただき、更に被災地の復興にお役立ちすることができました。話は変わりますがここ数年、宇都宮商工会議所と宇都宮市教育委員会が協力して、子どもたちに食品の大切さ、真のおいしさを知ってもらおうと市内の食品メーカーの技術者が学校に出向いて指導する「雷都物語手づくり教室」を展開しています。蕎麦打ちや豆腐、湯葉、饅頭、クッキー、カルメ焼の作り方、お米の炊き方や味噌の仕込みなど様々なジャンルがあります。この事業は、食育の一環でありますから材料費を含めすべて各メーカーに負担していただいています。私も年に何回か味噌教室で学校に伺いますが、子どもたちの一生懸命に取り組む姿勢や楽しそうな表情を見ると、この事業は長く続けて行きたいなと心から思います。

(2)

栃木県公立小中学校教頭会 結成50周年記念事業 平成24年11月30日開催

結成50周年記念式典



結成50周年記念式典並びに第50回研究大会が11月30日(金)に、宇都宮市文化会館で盛大に開催された。記念式典では、柿沼会長から「今年度は、基調講演とシンポジウム形式の研究大会とし、学校運営や教頭のあり方等について、あらためて深く考える機会としたい。」という主催者挨拶があり、その後、栃木県教育委員会教育長、栃木県市町村教育委員会連合会市教育長部会長、関東甲信越地区公立学校教頭会会長から御祝辞をいただいた。

研究大会（基調講演）

豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして

宇都宮大学教授 廣瀬隆人氏

日本の課題は、少子化・無業者・ひきこもりへの対策です。次に、保護者の対応では、全て「初期対応」が問題です。また、丁寧に対応し、親の気持ちを考え、人間的信頼関係を作るために誠意を尽くすことが大切です。校長との関係では、教育観や考え方を把握し、報告する習慣をつけましょう。主幹・主任との関係では、教頭が仕事を抱え込みすぎないようにし、人を育てるという視点を持つことです。最後に、自分の健康は自分で守るということです。



研究大会（シンポジウム）



シンポジウムは、テーマを「増大する学校への期待と教頭の果たすべき役割」として行われた。コーディネーターとして、宇都宮大学教授 廣瀬隆人氏、シンポジストは、栃木県教育委員会学校教育課課長補佐 田村一氏、大矢商事株式会社代表取締役 大矢裕啓氏、宇都宮市立城山西小学校長 木村寛之氏の3名で行われた。視点は4つ設定され、①保護者・地域からの要求・要望、②安心・安全な学校、③人を育てる（キャリア教育）学校、「生きる力」をはぐくむ学校とは、④地域の学校としてのあり方（学校運営協議会とのかかわり）として、話が進められた。視点①では、相手は何かを言いたくて来ているので、まず話を聞くことが大切である。また、一番最初の対応を間違えないこと等があげられた。視点②では、災害への対応や開かれた学校と安全・安心な学校をどう取り組むかという点で、学校だけでは難しいので、地域の安心安全な町づくりと連携していく等が例としてあげられた。視点③では、自立していくということが大切で、そのためには、コミュニケーションの能力、人とうまく接していく能力、我慢する力が必要となる等である。視点④では、宇都宮市の学校の取組が紹介され、教頭の役割、チーム体制での取組等が話題となった。

（文責：高根沢町立北高根沢中学校 菅間 登）

舞台裏から支えた研究大会

那珂川町立薬利小学校 川 上 ひより

結成50周年記念式典並びに第50回研究大会当日、約80名に及ぶ実行委員は、8時半に宇都宮市文化会館ホワイエに集合しました。そこから約1時間半、それぞれの持ち場で慌ただしく準備を行い、開会の運びとなりました。

私たちは、来賓接待として楽屋を行き来しながら、多くの来賓の皆様や講師の廣瀬先生、シンポジストの皆様をお迎えしました。皆様の多くは、かつて教頭会の一員だった先輩方であり、今でも会を支えてくださっている方々です。

当日は裏方として、モニターを通しての式典や研究大会の参加でしたが、多くの大先輩の皆様の間近でお会いすることができ、忘れられない思い出となりました。

運営委員として関わって

宇都宮市立河内中学校 熊 倉 仁

栃木県教頭会の50周年記念研究大会が過日盛大に開催されました。ここでは、運営委員として関わって感じたことを述べたいと思います。

まず、運営委員による当日までの準備や運営などが、実に組織的になされたことです。限られた会議や日程の中で効率的に準備を進め、当日も円滑に進行できました。改めて、組織的に対応する大切さを学ぶことができました。

次に、教頭会事務局の存在の大きさです。今回の大盛会は、常に裏方となって運営を支えられた松本浩子さん、竹内圭子さんお二人の存在なくしては成しえなかったと思います。

最後になりますが、このような貴重な経験ができましたことを、栃木県教頭会並びに携わった関係者の皆様に感謝申し上げます。

研究大会に参加して

鹿沼市立北押原小学校 関 口 晃 江

研究大会から、現在の社会は多くの問題を抱え、人々は多忙さや不安等から、学校に対して、多様にきめ細やかに対応していくことを期待し、その期待が増大していることを改めて認識しました。地域、保護者への直接の窓口となり、学校の組織的な対応の要が教頭であり、その重責を思うと押しつぶされてしまいそうな気さえます。

シンポジウムの中で、「当たり前と思わず、全て有り難いと思って…」というお話がありました。毎日、子どもたち、先生方、地域や保護者の人々と向き合えることに有り難さを感じます。しかも、同様の課題をもち取り組む多くの教頭先生方がいらっしゃることは心強い限りです。

多くの人々と関わることこそ有り難いと思い、一人で抱え込むことなく、教頭を務めていきたいと思えます。

教頭会結成50周年記念祝賀会に参加して

宇都宮市立若松原中学校 小 森 一 則

開会宣言に次いで、来賓を代表して古澤県教育長様と手塚第38代会長様のお二人から祝辞を頂いた。古澤様からは、先人の苦労があっての現在の教頭会であること。手塚様からは、五年間の教頭時代に校長から「教頭は『学校の顔』にならなければダメだ。」と教えられたこと。さらに、学校が正常に動いていくためには、校長は最後の砦であるから、教頭のところで種々の問題は解決していくことが教頭の役目であるということも話された。このお二人の話から、現役の教頭である我々の仕事の重責を改めて感じ、思いを新たにしました。その後、関東甲信越地区公立学校教頭会会長梅木様の乾杯の音頭で懇親会が始まり、和気藹々とした中で親睦を深めることができた。

関ブロ群馬大会報告

関ブロ群馬大会開会行事について

宇都宮市立石井小学校 渡 邊 誠



第53回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会が、11月8日(木)～9日(金)の2日間、「水と緑と詩のまち」前橋市と、「石段と温泉の町」渋川市において開催されました。

まず、アトラクションとして、地元群馬県の室内オーケストラ「カメラータ・ジオン」による「秋」をテーマにした演奏がありました。

続いて開会行事が行われ、関東甲信越地区公立学校教頭会会長の梅木守氏より主催者あいさつが、群馬県教育委員会教育長の吉野勉氏、全国公立学校教頭会会長の和田俊彦氏より来賓を代表してあいさつがありました。

続いて、群馬大会研究部長から、「群馬大会では、第九期全国統一研究主題である『豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして』の下、第1年次の新潟大会で築いた研究を継続し、これまでと同様に『継続性』『協働性』『関与性』に焦点化していく中で、これまでの研究をさらに発展させたい。また、子どもたち一人一人が将来、人として、社会人として、職業人として自立するための教育を営む場としての学校づくりにおいて、『自立・創造・共生』をキーワードに、時代性、適時性を意識した取組を強化していくことが必要であると考え、サブテーマを『自立・創造・共生の輪を広げ、未来へ躍進する学校づくり』とした。」と基調提言がありました。

参加者へのあたたかい歓迎の気持ちと心配り、研究大会成功への意欲に満ちた開会行事でした。

記念講演

「日本の古典の魅力について」：講師 群馬大学教育学部教授 藤本 宗利 氏

宇都宮市立陽東中学校 中山 俊 美

今までまったく無縁だった古典文学が小学校の国語の教科書に出てくる。「国語科の教員はまだいいが、他の教科の先生が古典を教えなければならない現状は問題です。しかしそれよりもっと問題なのは、『それはもう小学校でやった、またやるのかよ。』ということに興味を失いがちになる危険性をはらんでいるということに中学校の現場の先生方があまり自覚を持っていないということです。」と言って始まった講演会でした。

清少納言「枕草子」の「春はあけぼの」では、〈春はあけぼの、やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて…〉とあって、〈夏は夜〉そして〈秋は夕暮れ〉と続く。カラスがねぐらに帰ろうと飛んで行く姿が慕情を誘い、日が沈んだあとの風の音は、しみじみと、なんともいいようがない。などあるけれどこの項のどこを見ても紅葉は出てこない。誰もが秋で連想する名月にも触れぬ。春はまず桜であるはずなのに影も見せない。平安朝の夏を代表する風物はホトトギスだがこれも不採用。なぜ清少納言は当時の美意識に反することがらを連ねたのか。藤本氏はそう問題を投げかけて解き明かしてくれた。春は桜、秋は紅葉といった固定化された季節感、自然感に浸っている読者の感性を揺さぶる。それこそが作者の狙いだったのではないかと。もっと自由で新鮮な目で周囲の世界を見ることを求めたのだ、と。

ほとんどの日本人は教室が「春はあけぼの」との出会いになる。小学生や中学生に作品の良さを味わってもらうためには、指導者が作品や作者、時代背景についての深い理解が必要であると熱く語ってくれました。



関ブロ群馬大会での提言発表を終えて

＝第3(2)分科会＝

さくら市立喜連川中学校 飯山 高行

11月8日、9日の2日間にわたり、第53回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会群馬大会が前橋市で全体会、渋川市伊香保町で分科会が開催されました。

栃木県を代表し塩谷地区小中学校教頭会が、第3(2)分科会「教育行財政に関する課題」において、研究主題を「子どもが生き生きと活動できる小中連携と行政との連携・協力」、副主題に「ボランティア活動を通して」とし提言発表を行いました。

発表は、小中学生が一緒になって行うボランティア活動を小中連携の軸の一つとすることで、よりよい人間関係を構築しながら小中連携を進めてきた事例を中心に行いました。また、教頭の関与性については、それぞれの取組に対して、関係職員や行政にどのような働きかけをしたかを整理し提言しました。

発表後のグループ協議では、「小中連携に向けた教頭のかかわり」「小中連携を充実させるための行政のかかわり」の二つを視点として協議がなされ、各都県の小中連携の状況や課題等の意見交換ができました。

指導助言では、「小中連携においては、連携することが目的になりがちだが、連携によってどのような効果があるのかを明確にして連携を進める必要がある。教頭は、学校間と教職員の意識をつなぐ役割がある。」との貴重な助言をいただきました。

今後も、子どもたちが生き生きと活動できる学校づくりをめざしていききたいと思います。

関ブロ群馬大会分科会に参加して

＝第1A分科会＝

市貝町立市貝小学校 石河 雅規

第1A分科会「教育課程に関する課題」(小学校)では、午前「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と活用する力の育成」を、午後は「地域の特色を生かした教育課程づくりに向けて」をテーマに活発な話し合いがなされました。前半部は、今回の学習指導要領の柱の一つである「言語活動」を充実させるための教職員への指導助言をどうするか、また、後半部では、地域の教育力を生かし特色ある学校づくりをどう進めるか、共に教頭としての支援方法やかかわり方などを学ぶことができました。特に、各都県の現状や取組事例などについて情報を交換することができ、学校運営における教頭の役割の大きさを再考する上でも、大変有意義な研修となりました。

関ブロ群馬大会分科会に参加して

＝第6B分科会＝

足利市立山辺中学校 竹越 功祐

本分科会は、「副校長・教頭の職務に関する課題」をテーマに、午前中は、埼玉県本庄市立児玉中学校の中田守教頭先生より「教職員の資質向上を図るための教頭の役割」について、午後は、群馬県甘楽郡南牧村立南牧中学校の小河原修教頭先生より「義務教育9年間を見据えた小中連携の在り方と教頭のかかわり」について発表がなされ、それをもとに、グループ協議が行われました。

教頭としての授業参観の在り方、授業力を高めるための校内研修の在り方、小中連携の推進のための教員の意識改革の図り方、学校の独自性を生かした教育課程の連携等について、各都県の具体的な取組や工夫、その成果、今後の課題等について、活発な意見交換が行われ、今後の教育活動の参考となりました。このような有意義な機会を頂いたことに感謝申し上げます。



「豊かな郷の生き生きとした子どもたち」

宇都宮市立豊郷中学校 木村 茂

「豊かな郷」の名のとおり、豊郷地区は宇都宮市の中でも豊かな自然に恵まれた地域です。南北に流れる田川の水は周囲に水田を張り巡らし、夏は青々と、秋は黄金色に輝き、冬になると学校プールがカモたちの憩いの場になるのどかな環境の中に、豊郷中は広々としたグラウンドと2階建ての体育館を有し、そこで生徒は伸び伸びと文武両道をめざした活動を繰り広げています。

今年度は、小中一貫教育フロンティア地域学校園として、地域の3小学校や関係諸団体と連携を深めながら様々な取組を推進しています。その中の1つが、長年続いている古墳清掃です。

豊郷地区には数多くの古墳が今も残り、地域の財産として守られています。現在の北山霊園周辺の北山古墳群と宇都宮美術館や帝京大学周辺に広がる瓦塚古墳群・長岡百穴は、今につながる歴史の重みを感じさせてくれます。生徒たちは、自分たちの大切な歴史的遺産を守り、次の世代に引き継いでいこうという意気込みで、地元愛護会の人々の支援のもと年に2回ボランティア清掃活動に取り組んでいます。さらに地域内の帝京大学と連携して大学生ボランティアによる放課後の学習支援活動の推進や、地域人材を活用した演奏会・講演会の企画など地域の教育力を取り入れた活動を進めています。

また、本校ならではの取組の一つに「タイム着席」があります。10年以上続いているチャイムなしでの授業展開では、生徒は時計を見ながら自主的に着席し、意欲的に学習しています。また、体育祭や文化祭等の学校行事では「感動のある学校にしよう」をスローガンに、心を通じ合わせながら粘り強く努力し、本校が目指す「豊かな郷の生き生きとした子どもたち」に日々成長しています。

「地域発見」ふるさとウォーク

大田原市立須賀川小学校 伊坂 永夫

ふるさとウォークは、郷土の自然・文化遺産や史跡・産業・人々とふれあいながら郷土を愛する心を育てることを目的の一つにして、過去に小学校のあった須賀川地区・須佐木地区・川上地区を年度ごとにローテーションして歩く学校行事である。

今年度は、5月30日(木)に須佐木地区を歩くことになった。全児童53名、職員、保護者、老大師、地域の方など総勢約80名で、約12kmの道のりを歩いた。午前8時30分に学校を出発。寅卯神社と洲崎神社で、それぞれの地域ボランティアの方に神社の由来などについて説明していただく。トイレ休憩後、御亭山(こてやさん)頂を目指してのウォーキングである。1年生も昼食、水筒の入ったリュックを背負いながらついてくる。いつのまにか、上級生が、手を引いたり、リュックを持ったりしている。昨年も同じような光景が見られたが、これが思いやりの心を育てたり望ましい人間関係を築いたりするのにつながり、よき伝統として引き継がれていくように感じる。11時頃に、那珂川を眼下にした山頂付近に到着。ふるさとを知る会の方から、綾織池にまつわるお話をしていただき、綾織池を見学する。御亭山頂で作詞家の老大師と一緒に校歌を歌ったり、俳句づくりしたりしながら、午後3時前に学校に到着した。

生まれ育った故郷を愛せるようになるには、故郷のよさを実感しなければならない。6年間に2度、同じ場所を歩きながら、そのよさを自分でしっかり見つけていってもらいたいものである。



日々新たである教頭をめざして

下都賀地区小・中学校教頭会長 中野 哲雄

下都賀地区小・中学校教頭会は、3市（小山市、栃木市、下野市）3町（壬生町、野木町、岩舟町）の小学校83校、中学校33校の計116校の教頭で結成され、県内最多数の会員を誇っています。元から会員数の多い地区でありましたが、近年の市町合併により、旧南河内町、旧西方町を新たに加えることによって、さらに会員数を増加させることとなりました。

教頭会役員は、小山市（A地区）栃木市（B地区）下野市と3町（C地区）の3地区輪番制で選出されています。この3地区それぞれが小学校と中学校に分かれ6グループとなって、平成23年度からの第九期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」にせまるための研究に取り組んでいるところです。小学校3グループは、第3課題の中から「PTA及び地域社会に関する課題」、中学校3グループは、第5課題の中から「教職員の専門性に関する課題」がテーマとなりました。

今年度は、2年次にあたり、1年次で捉えた実態と課題を受け、特に地域との連携のあり方や教職員の資質の向上を図るためには教頭はどう関わっていくべきかについて、実践と検証を中心に進めて参りました。研究の成果は、研究集録にまとめられ、10月25日の下都賀地区研究発表会には、4グループが口頭発表を行いました。最後に、下都賀教育事務所の学校支援課長より指導講評をいただき、成果の確認が出来ました。来賓として下都賀教育事務所長、教育長、校長会代表を招き、その他関係市町の全指導主事に案内を出し、盛大に実施することができました。発表会後は、100名以上の参加で懇親会が開かれ、関係諸氏の同僚性を高める良い機会となりました。

資質の向上をめざし、学び続ける教頭会

塩谷地区小中学校教頭会長 小野 恵美子

塩谷地区小中学校教頭会は、矢板市・さくら市・塩谷町・高根沢町の教頭34名（小学校24校・中学校9校）と県立矢板東高等学校附属中学校の教頭1名の計35名で組織され、「研修部」と「調査・要請部」の2つの専門部を置き、活動しています。

本地区は少子化による児童生徒数の減少から学校の統廃合が検討され、この7年の間に13もの小中学校（小学校11校、中学校2校）が閉校となりました。それに伴い、会員数が減少し、組織や研修会のあり方など活動内容を含め、見直しを行いながら活動しています。

活動の中心は「研修・研究」ですが、「研修部」で検討した研究テーマや趣旨をもとに各市町で研究を進め、その内容を一冊の研究集録にまとめ、毎年、秋に研究大会を開催しています。今年度も10月に「第64回塩谷地区小中学校教頭研究大会」を開き、各市町の研究成果を互いに共有し、情報交換を行いました。

今年度は第九期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」研究課題「教育環境整備に関する課題」を受け、本地区の研究テーマを「子どもが生き生きと活動できる小中連携と行政との連携・協力」としての二年目であり、「小中連携のあり方」「小中連携における行政との連携・協力のあり方」及び「教頭の関与性」を明らかにすべく研究してきました。また、11月8日、9日に行われた第53回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会（群馬大会）において本地区教頭会（さくら市）が提言発表を行いました。

今後も「教頭としての職責を果たすための相互の連絡と研修をなし、小中学校教育の振興に努める。」という本会の目的に沿った活動の充実を図っていきたいと思います。



ファイト！とみや！！

宇都宮市立富屋小学校 関山英二
地域と合同で開催される運動会「ファイトとみや！」はまさに壮絶なドラマである。

地区対抗の「綱引き」では、スターターが飛ばされ転倒するなど大迫力である。

また子どもたちも、PTAや地域の方との融合種目などもあり、どの種目も全力で楽しく取り組んでいる。

得点争いは、学校は紅白、地域は7地区で争われ、応援の迫力も抜群である。

今年は、荒天のため実施が一週間延びたため、有力選手が都合で出場できなかった地区もあった。それにもかかわらず大いに盛り上がりを見せた運動会となった。

おらが地区の勝利のために全力で戦う姿が、子どもたちにより影響を与えている。



「校木 大いちょう」

佐野市立栃本小学校 前出哲子

本校には、幹の太さが4mもある大いちょうが第1校庭にそびえ立ち、創立以来138年間多くの子どもたちと学校を見守ってきました。10月の初めからぎんなんを落とし始め、12月初めにはほとんどの実と葉を落とし、すっかり冬の姿に変わります。ぎんなんは皆さんもご存じのとおり独特の強いにおいを発しますが、栃本小の子どもたちは毎朝、登校してくるといやな顔一つせず拾います。伝統ある校木であり、地域のシンボルでもある大いちょうから落ちたものであることをみんなよく理解しているので、ぎんなんを踏みつけないように気をつけながら、一粒も残さず拾おうとします。そして、5、6年生が洗って皮を取る仕事を何度か行います。これらの活動を通して、子どもたちに勤労の精神と愛校心が培われていきます。

今年も地域の祭りや学習発表会の際に、ぎんなんのにおいに顔を少しゆがめていた子も、校木がくれた贈り物を誇らしそうに販売する姿が見られました。

大いちょうは、今日も「仲良く、根気よく、たくましく 大いちょうのような人になれ」という校訓にもなって、子どもたちや職員を導いてくれています。

グリーンカーテン2年目

那須烏山市立七合小学校 高堀孝男

本校では、3・11東日本大震災以降グリーンカーテンを作っています。6月26日、今年も1・2年教室・特別支援学級前をアサガオの、校長室前をパッションフルーツのグリーンカーテンにするネットを張りました。2階のベランダの手すりから両端にスズランテープを通したネットを下ろします。垂らしたテープの端を花壇に固定して完成です。手入れや草むしりは、毎週水曜日の朝、V・Sの時間に行います。(V・Sといっても「戦い」ではありません。ボランティア・サービスの頭文字です。)

9月4日、1階各教室前のアサガオは、見事に生育し校舎前面を覆う巨大なグリーンカーテンになりました。また、パッションフルーツも大きな実をつけています。2学期に入り、残暑厳しく30℃を超える日が続いていますが、このグリーンカーテンのおかげで涼しげです。また、朝夕水をやるので「打ち水」効果も表れ、節電効果が期待されます。さらに、担任から「児童がよそ見をせず、授業にも集中できる。」という声もありました。

10月24日、前日「霜降」を迎え、秋も深まってきています。すっかり枯れてしまったヒマワリのグリーンカーテンを撤去しました。職員室前の花壇には、何故かスイカが季節外れの実を付けています。

編集後記

この原稿の締め切りが近づき、準備を始めた矢先の12月7日の夕刻に、東日本大震災の余震とみられる震度5弱の強い地震が県内を襲いました。あの未曾有の大地震の緊張が脳裏にフラッシュバックしました。危機管理の意識が薄れないための警告と受け止めたい。

今回の会報は、昭和38年に発足し、結成から半世紀を迎えた県教頭会の記念式典や研究大会を中心に掲載しました。原稿の執筆や写真の提供等のご協力をいただいた会員の皆様に、心より御礼申し上げます。そして、今後もこの会報が、50年の歴史の確かな足跡となるとともに、会員相互の情報交換の一端を担えれば幸いです。

(長谷川)